
10 years ago ~ 十年前の君へ ~

タイヨウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

10 years ago ～十年前の君へ～

【Nコード】

N3138G

【作者名】

タイヨウ

【あらすじ】

知り合いを失ってしまった少年。彼は、何を思い彼女に何を伝えるのか。少し短い、ラブストーリー。

1話：過去への思い

■——過去への思い——

ざわめく、人々の群れ。

照り返される車のヘッドライト。

何度も、何度も変わった信号。

信号は、点滅を繰り返し、赤に変わる。

そして、赤い光に照らしだされる赤黒い肉片。

ついさっきまで、俺の隣で笑っていた。

ついさっきまで、俺と話していた。

「何で・・・」

俺のつぶやきは、人の雑踏にかき消されていく。

ゆっくりと、ひざから力が抜け、その場に座り込む。

彼のかけていた、メガネが地面へと落ちていく。

グシャ

メガネは、彼の目の前で踏み潰され、粉々になってしまった。

まるで、目の前であの肉片になってしまった、彼女のように。

その時、俺の周りの温度が、急に下がったように感じた。

彼女は、今、死んだんだ。

血だらけになった、横断歩道は、そのことを俺に冷酷に告げていた。

2話：未来

■——未来へ——

「ん？どうした。三笠^{みかさ}。腹でも痛いのか？」

「ち、違うよお。なんでそうなるかなあ？思考回路がおかしいんじゃない？」

「それは、ひどいな・・・」

少し、赤みがかった髪の少年。須藤^{すどう}連花^{れんか}。

彼は、極普通の少年である。

背もそこそ高く、ルックスもなかなか良く、

たまに告白をされたりなんだりの話も少しはある、という少年だ。

そして、隣で思考回路について熱く語っている、三笠と呼ばれた黒髪の少女。

いつも明るい太陽のような、少女だった。

「ちょっとね。今、変な感じがしたんだよ。なんか、後ろ髪を引っ張られるというか・・・」

「つかい方、間違ってたんだろ。それ」

「いいんだよ。表しようがないんだから、この感じは！！」

怒った口調で声を張る。 雨宮 あめみや 三笠 みかさ。

この二人は、幼馴染である。

今は、高校3年、7月14日。

もうすぐ、夏休みに入る直前の状態。

普通は浮かれてしまうのだろうが、3年ともなると、受験を控え、勉強するのが普通なのだろう。

「連花は、夏休みどうするの？やっぱり、勉強？」

首をかしげながら、尋ねてくる三笠。

遠まわしに尋ねているが、どこかに行きたそうにしているのが、丸分かりだ。

こういう時は、直球で聞いたほうがいいだろうと、目星をつけ、

「何、どこか行きたいの？」

そついうと、三笠は、待っていましたといわんばかりに、笑顔の花が咲き。

「じゃあ、海に行かない？」

「海？俺って、泳げないんだよなあ」

「えっ、そうだったっけ？じゃあ、どうしよう・・・」

うつむいて、考え込んでいる三笠は、チラリと連花を見た。

その視線を受けて、連花は一つ息を吐くと、

「いいよ、別に泳ぐだけが遊びじゃないし」

「やった、じゃあ、今度電話するね。そうだ、ついでに泳ぎ方も教えてあげるよ」

「いいよ、めんどくさい」

連花は、そういつて手をひらひらとふって、先に歩いていってしまった。

二人は、今、帰宅途中。

三笠は、美術部、連花は陸上部に入っていて、

今日はたまたま帰りが一緒になったため、一緒に帰っている。

三笠は、連花の少し後ろを歩いて、なにか楽しそうに考えていた。

（聞いちゃいないな。しゃあない）

連花は、海に行くことを、少し後悔していた。

「じゃあ、また明日」

連花は、ぼそぼそとなにかつぶやきながら、考え事をしている三笠に声をかけた。

すると三笠は笑顔を連花に向け、

「じゃあね」

と小走りに、少し先の三笠の家についてしまった。

「ああ・・・」

彼は、少し火照ってしまった頬をつねり、

（何やってんだ、俺。目が合っただけで、顔が熱くなる・・・）

空に浮かぶ、大きな入道雲を見つめた。

（俺は、あいつの事・・・）

青空は、どこまでも青く澄んでいた。

3話：穴

■——穴——

（連花との、海。楽しみだなあ）

三笠はとても上機嫌だった。

（久しぶりに、連花とも話せたし）

時々、校門前で待っているという、健気なところもあったのだが、全くうまく行っていなかった。

三笠は自分の家の門の前で、大きく伸びをした。

「よしっ」

と、気合をいれて、門に手をかけた。

その時、急に足にかかる体重が無くなった。

「えっ？」

違う、足元に大きな黒い穴が開いていた。

彼女は、後ろに倒れるように、足元の黒い穴に落ちていく。

（これ・・・やばいよね）

門にかけていた手に力を入れて、体はのけぞる様な体勢になって止まった。

穴のふちに、引っかかっている片足で、何とか踏みとどまってる状態だ。

（危ないなあ。こんな、所に穴なんて。掘っちゃだめでしょ）

と、穴はどう見ても、人工的に掘ったものじゃないことが、分かるはずなのだが。

そんなのんきな事を考えていた。

「どうしよう。この後・・・」

今の三笠の体勢は、筋力的にとってもつらいのであった。

そして、さらに状況を悪化させるものが現れた。

穴から出てきた手が、三笠の手をつかんだのだ。

「ふえ？」

間抜けな声がした。その手は、三笠を強く穴へ引き込み、その反動で穴から出てきたのだ。

「私？」

その、穴に引き込んだ手の正体を、視界の端で目撃した。

その言葉を最後に、三笠は深い深い穴へと、落ちていった。

4話：タイムトラベル

■——タイムトラベル——

穴の中は、まるで海の中のように静かで暗かった。

ドブン

水でもあったのだろうか、何かの中に入り込んだ。

少しずつ意識が遠のいていく。

（私、どうなったんだっけ？）

今頃になって、やっと追いついてきた頭が、今の、現状を考え始める。

妙な浮遊感が三笠を包んでいたかと、思うと一瞬にしてそれが無くなり、急に落下を始めた。

（何？何？これ）

あわてて、状況を見極めようとした時、ドサリ何かの上に落ちた。

「ぐえっ」

「うえっ？」

多少の痛みはあったが、そこまでの痛みは無かった。

怪我もないし、クッションのように男の人が下敷きになってるだけで、

「お、重い・・・」

「ああ、ごめんなさい！」

三笠はあわててどき、その男性にお辞儀をした。

三笠は落ち着いて周りをみて見るとそこは、三笠の家の前であった。

「あれ？私、どうしたんだっけ？」

「…、やっぱり、お前変わらないな」

「あ、そうだ。家に帰る途中だったんだ！」

「おっ、おい」

「それじゃあ。よく分からない人。さようなら」

「ちょっと待てよ！」

「はい？」

三笠は、首をかしげて勢いよく立ち上がった男を見つめた。

その男は、少し赤みがかった髪をしていて、とても誰かに似ていた。

（あれ？会った事あるかな）

そして、フレームの細いめがねをかけていた。

男は頭をガシガシとかいて、

「はあ、やっぱり、いつになってもお前のペースなんだな。

…いや、昔だから当たり前なのか」

「あの、私の知り合いですか？」

三笠がそう尋ねると、男は一瞬キョトンとした顔になり少し自嘲気味に笑った。

「そりゃそうか」

悲しそうに、つぶやいて男は、ズボンについたホコリをはらった。

（あ、連花に似てるんだ）

考えていた三笠が、ようやく気づいたとき、男は三笠の頭を優しくなでた。

その雰囲気も連花にそっくりだった。

（本当に似てるなあ。家族かな）

三笠はそう、思いながら、男を観察していると、いつの間にか、

その男の後ろに黒いぼろぼろの服を着た女の人が立っていた。

その女は、三笠を一瞥してボソリとつぶやくように言った。

「これで、いいのか？」

「ああ。ありがとう」

「礼を言われることはしていない。私は私の仕事をしたまでだ」

そういつて、風のようにどこかに消えてしまった。

（あれ？そこにいたのに）

三笠が目をごしごしとこすった。

あたりは、夕暮れ。

オレンジ色に染まる町並みが、もうすぐ訪れる夜を告げている。

三笠の周りが急に暑くなった。何かで、三笠の視界がさえぎられた。

「ごめんな・・・」

悲しそうな声で、そんな台詞が頭の上からふってきた。

三笠は今頃になって、誰かに抱きしめられていることが分かった。

（誰に？）

思考をめぐらせると徐々に視界が開けていった。

そこにあっただのは、あの男の顔だった。

その表情は、優しげな、とても悲しげな表情だった。

（連花？）

頭の隅を連花の顔がよぎる。まるで、彼が連花、本人のように。

「あの…、どうしたんですか？それより、あなたは誰なんですか？」

三笠がそう尋ねると、彼は、うつすらと笑って、

「俺は、お前が知ってる。須藤 連花だよ」

そう、告げた。まるで、明日の天気でも話すかのように、気軽に。

「え？」

三笠の口からこぼれた言葉は、

いきなり吹いた、夏の風にさらわれるように、消えていった。

5話：事実

■——事実——

「俺は、お前が知ってる。須藤 連花だよ」

「え？」

三笠にはその言葉は、理解しがたかった。

感覚で、そのことを肯定している自分がいる。

しかし、頭がそれに追いつかなかった。

「そ……」

だから、こんな言葉しかいえなかった。

「そんなわけ、ないじゃないですか。連花は私と同じ年ですから」

「おっ……おい。ここまで、ためて、それかよ」

気の抜けたように言う三笠に、連花と名乗る男は、

「かなり、緊張してたんだけどなあ」とぼやきながら、苦笑いを浮かべた。

彼は仕方ないというように、ため息をつき、三笠に背を向けた

「少し、歩きながら話そう」

そういつて、歩き出す男の後を、追つか迷っていた三笠だったが、そのあとをゆっくりとついていった。

頭に、よぎる彼の顔を思い浮かべながら。

彼は、歩きながら色々と、三笠について話していた。

好きな食べ物や嫌いな食べ物、他にも色々と、その全てが合っていた。

のんきな三笠も、

（これが、うわさのストーカー、なのかも）

と思いはじめた時、彼はこう告げた。

「俺は、中3の夏。お前と海に行った」

「っ・・・」

そのことは、まだ三笠と連花しか知らないはずのことだった。

さつきから、頭をよぎる連花の顔。

あらまで分かっている、心が「これは、連花だ」と告げている。
似すぎていた。

「もしかして・・・」

あまりにも、似すぎていて、

「連花なの？」

信じるしかなかった。

その、フワフワと宙に投げた言葉を彼はしっかりと受け取り。

「初めに、言っただろ」

と、連花にそっくりな笑顔で笑った。

6 話：存在

■——存在——

二人は今、住宅街を歩いていた。

見慣れた景色のように、三笠は感じたが、どこかに違和感が残る。

（本当に、ここは未来なのかな？）

連花が、言うには、ここは10年後の未来だそうだ。

あの、夏の日からちょうど10年。

連花は今もこの町に住み、生活をしているらしい。

他にも、駅前がだいぶ変わったこと。

三笠の友人、九条^{くじょう} 琴美^{ことみ}がタレントになったことなど。

今の三笠には信じられないが、色々なことを聞かされた。

「それで、俺は今、教師をやってたんだ」

「へえー、そうなんですか。どこの学校ですか？」

「俺達の母校の中学。ついでに、塾の講師もやってる」

「……いいんですか？そんなことをして」

「いいんだよ。たぶん」

この適当な感じは、三笠の知っている連花と変わっていないのだが、三笠はやはり、まだ信じ切れなかった。

そのことは、連花も分かっているようだった。

「やっぱり、信じらんないよなあ」

「え？」

いきなりの、言葉に三笠はびくりと肩をすばませた。

「ありえないよな。こんなこと」

「い、いえ。そんな事、ないです」

「いいよ。無理しなくて」

「…」

確かに、信じられなかった。

今、三笠の隣にいるのは、大人になった連花。

それは確かだと思っている三笠なのだが、

（やっぱり、無理だよ。いきなり、そんなこと言われても・・・）

「そうだよな・・・」

そう、連花がポツリとこぼしながら、目頭の近くを軽く引つかいた。

「あつ・・・」

その時の連花の表情には見覚えがあった。

不安な時、悲しい時によくそうしていた。

（私だけが知ってる。連花の弱いところ）

その時、彼女はやっと理解した。

（連花は、変わってないんだね）

今、隣にいるのは連花なのだと。

「今、分かりました」

「え？」

「あなたが、私が知っている。連花だって言うこと」

いつもの、花のような笑顔。

それが、彼女に不安が無いことをあらわしているようだった。

連花は、始め、驚いたように見ていたが、笑顔で三笠に答えた。

そして、三笠はふと疑問に思ったことを口に出した。

「ねえ、今の私はどうしているの？」

その瞬間、連花の表情が凍った。

7 話：疑問

■——疑問——

「それじゃあ、今の私はどうしているの？連花」

そう尋ねると、連花は気まずそうに視線をそらした。

三笠はそれに気づかず、会話を進めていく。

「何に、なったんだろう？画家？陸上選手？すごい有名なったら嬉しいなあ。どうなの連

花」

「……」

連花が、一向に答えようとしないのを疑問に思い、首を傾げると連花は一言だけ、

「ついてきて…くれるか？」

とつらそうにいった。

連花がつれてきた場所。

それは、大きな交差点だった。

さっきから、青のランプだけが静かにかがやいている。

大勢の人々がいきかっている一角に、花束が置かれていた。

それは、ここで人が亡くなったことを切々と告げていた。

「ここが・・・どうしたの？」

三笠は、交差点から目を離さずポツリとこぼすように言った。

まるで、何かが分かるかのように。

連花は置いてある花束をつらそうに見つめ、はき捨てるように答えるのだった。

「ここだな。お前、事故にあつたんだ・・・。2日前に」

「・・・」

三笠は、感じていた。感覚で。直感で。

（私・・・、ここで死んだんだ。本当に？）

分かってしまった。その場所を見た瞬間に。

その事実、三笠にナイフのように突きつけられた。

（どうして・・・）

彼女はただひたすら。

（何で、死んじゃったの？）

夢であるように願うのだった。

しかし現実には、変わることもなく三笠の目の前にただ広がっていた。

8話：帰宅

■——帰宅——

（事故…）

三笠は、呆然と眺めるしかなかった。

あまり、信じていない。

信じたくないが、分かってしまった。

自分がここで死んでしまったことを。

「理解、できるか？」

連花のその言葉に、三笠は無言で頷いた。それをみて連花は、

「そっか・・・」

とだけ、短く言った。

「戻るか」

「うん…」

きびすを返して、来た道をまた戻っていく。

連花のあとを少し遅れて、三笠は足がとても重かった。

連花は、早く離れたいのか、とても早足だった。

また、住宅街に戻ってきた。

さつきまで、普通に笑顔で話せていたのに、もうそんな余裕はない。

「あいな…」

連花は、独り言のように後ろでゆっくりと、歩いてくる三笠に言った。

「その時な。俺、見てたんだ。っていうか、直前まで話してたんだ」

一言、一言こぼれていくように、

「笑ってたんだよ。お前が、いつもみたいに。花みたいな笑顔でさ、それが…」

聞いているかも、分からないその言葉は、そこで止まった。

三笠は黙って、連花の少し後ろで連花の背中を見つめていた。

もしかしたら、泣いているのかもしれない。

じっと、下をむいて立ち尽くしている連花。

その後ろで、三笠の頭はグルグルとまわっていた。

（この時代の、私は死んでる？）

頭で、理解しようとしていた。

（私は、１０年後に死ぬ？）

理解、出来なかった。あまりにも、大きい事だから。

「連花・・・」

「・・・」

すぎる様に、名を呼んだ。

しかし、連花は黙ったままだった。

三笠は、体をそっと連花の背中に預けた。

連花の体が少しこわばるのが分かった。

そして、ため息のように言った。

「ごめんな・・・」

初めて、会った時のように。

「・・・」

（何で、謝るの？分からないよ）

そう言いたかった。言って、慰めてあげたかった。

でも、出てこなかった。

そして、また二人はゆっくりと歩き始めた。無言のまま。

そして、いつの間にか三笠の家の前についていた。門の前で、彼は言った。

「ここで、お別れだ」

そういつて、彼はカイロのような物をポケットから取り出した。

「…どういうこと？」

「…お前の時代に戻るんだ」

そう言うのと、彼は、思い切りその袋を破いた。

すると、中から、明るい光が出てきて三笠の体を包んでいく。

「大丈夫。戻るだけだから。…俺のこと、またよろしくな」

「ちょっと!」

「ごめんな……。お前を守れなくて」

「え？」

そして、三笠の視界は光に包まれていく。

「連花のせいじゃ・・・」

「ずっと、大好きだったよ。三笠…」

その言葉が最後だった。

三笠のまわりは、光から一変し、暗闇に包まれた。

9 話：現代

■——戻ろう——

暗闇のなか、三笠は思った。

（私、なにも伝えられなかった…）

来る時に経験した、あの妙な浮遊感の中、三笠はグイグイと光に向かって引つ張られていく。

「伝えなきゃ…」

ポツリと、自分に言い聞かせるように言って決意する。

（私は、連花に伝ええないといけない）

徐々に光が大きくなっていく。出来るだけ早く出ようともがいてみる。

速さは変わることがなかったが、少しだけ。

もやもやとした心を紛らわすことが出来たように感じた。

「え？」

光の先から、三笠自身の声が聞こえた。

もちろん今の三笠は声を出していない。

光の先には、三笠がのけぞった状態で静止していた。

（これって、デジャブ？）

どこかで見たことが、あるような光景に首をかしげ思っていたが、

「おお！」

と手をたたき、

（そっか。あれはやっぱり私だったんだ）

そして、三笠は、ゆっくり、のけぞっている三笠の手をつかんだ。

「ふえ？」

三笠は、一気に穴へ引き込みながら、自分は外へと自分の時代へと出た。

「頑張つて・・・」

と、声をかけて。

「聞こえたかな？」

首を傾げながら、消えてしまった穴が、あった所を見つめる。

（ありがとう、連花。私に伝えてくれて。）

「よしっ！」

三笠は気合を入れて、門に手をかけた。

今までとは違う決意を、心に刻みながら。

彼女は知ったのだ、彼女の運命を、未来を。

三笠の思考はぐるぐると回りながら、伝えられた現実を確かに受け止めていた。

10話：夏の海

■——海——

今、三笠たちは、海にいた。

そして、浜辺には、三笠と連花の二人しかない。

他にも、数人いたのだが、二人は荷物番として残されてしまった。

気を利かせて（ただ単に、面白がってやったただだが）

（あいつら、はめやがった・・・）

遊びに行った奴らを恨みながら、連花はこの気まずい空気に耐えて切れず、話し切り出した。

「暑いな」

「うん」

「……」

「皆、どこいったんだろうな」

「うん」

「……」

（き、気まずい・・・）

連花は、冷や汗を流しながら、なにか話題はないかと模索している。連花が必死に何かこの空気を打開する糸口はないかと、いつも使わない頭をフル回転していた。

すると、三笠が何かぼつりと、独り言のようにしゃべった。

「は？」

「連花は、全然悪くないよ」

そういつて、三笠は、連花に笑顔に向けた。

「なんのことだよ？」

連花はただ首を傾げ不思議そうに三笠の笑顔を見つめたが、

三笠はクスクスと笑って答えるだけだった。

そして、思い出したように付け加えた。

「あつ、あとね」

「ん？」

理解できていない、連花を横目に三笠は、海の手を見つめるように遠い目をしながら。

「私もだよ。連花」

そう、いった。

連花に対する、答えを。

三笠に伝えた、あの最後の言葉の答えを。

そして、彼女は未来を生きていく。

彼女の未来に何が起きるかを知りながら。

連花には、その後の三笠がなんだか大人のように見えたという。

まるで、十年先に歳をとってしまったかのような。

そんな雰囲気漂わせていた。

~~~~~  
f i n  
~~~~~

10話：夏の海（後書き）

はい、スイマセンでした。炎道 緑です。

ほんとに思いつきで書いてしまいました。

全くもってめちゃくちゃな話になってしまいましたが、まあ多少は出来たのかなと思います。

この話は、「時売り」という話のショートエピソードというか、そんなかんじです。

いろいろと、書いていきたいと思っておりますが、なにかご注文がありましたらお伝えください。

本当に、スイマセンでしたさあ。

今度はもつと真面目に考えます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3138g/>

10 years ago ~十年前の君へ~

2010年10月28日03時14分発行